HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	シベリア文学観光の研究 ： 地域アイデンティティ・記憶・身体化に着目して［論文内容及び審査の要旨］
Author(s)	Vovk, Viktoriia
Degree Grantor	北海道大学
Degree Name	博士(観光学)
Dissertation Number	甲第16041号
Issue Date	2024-06-28
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/92792
Rights(URL)	https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/
Type	doctoral thesis
File Information	VOVK_Viktoriia_abstract.pdf, 論文内容の要旨

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

学位論文内容の要旨

博士の専攻分野の名称：博士（観光学）　　氏名：ヴォフク　ヴィクトリア

学位論文題名

シベリア文学観光の研究
―地域アイデンティティ・記憶・身体化に着目して―

本論文の目的は、近年、シベリアに所縁のある作家が制作した地域の歴史や文化を主題とした文学作品群からなる「シベリア文学」に焦点を当てた観光ツアーが多く実施されていることに着目し、はたしてそうした「シベリア文学観光」はどのような社会的、文化的な意義を有しているのかという問いについて、文学、歴史、地域研究、観光研究の分野にまたがる領域横断的手法を用いて明らかにするところにある。そうした目的を達成するため、まずはシベリア地域アイデンティティがいかに形成されてきたのかという点について歴史的に俯瞰し、またそうしたアイデンティティ形成と影響しあいながら展開してきたシベリア文学のうち20世紀後半の「農村文学」および「エコロジー文学」を中心に考察を加えてその特徴を明らかにした上で、インタビュー調査及びアンケート調査によるデータを基にしてシベリア文学観光の実践に関して観光社会学的な視点から分析を試みる。こうした考察、分析の結果として、ロシア連邦文化省の政策的提言に基づき、地域博物館、文学館等の主催者が企画、提供するシベリア文学観光の実践においては、定式的な観光スポットを周遊するという点においては「孤立的」観光空間の要素が色濃く伺われる一方で、参加者個々の細かな観光行動においては、即興的、自発的なパフォーマンスが許容される「混交的」空間の側面を見出すことができるのであり、特に具体的な事物に触れることによって喚起される身体的、感覚的経験と、そうした経験を通した個人的な生活の記憶の想起によって、文学観光ツアーによって参加者の地域アイデンティティが強化されることが、シベリア文学観光の最大の特徴であると主張される。

第1章では、シベリア地域アイデンティティいかなる特質を有するのかを明らかにする。関連する文献資料の調査にもとづいて、シベリア地域アイデンティティとは10行政地域の文化空間を統合する社会文化的現象であることを示した。16世紀末からの歴史的プロセスの枠組みの中で形成され、自然、民族文化などの特徴を含む一方、ロシア中央部との「中心」と「周縁」の関係を軸として構築されたものである。シベリア地域アイデンティティを持つと自認する者は、自身をシベリア人、すなわちシベリアとの精神的なつながりを持ち、シベリアの社会文化的空間に帰属する存在として認識することが確認される。

第2章では、シベリア文学について検討する。シベリア文学観光では20世紀後半のシベリア文学作品が扱われるため、20世紀後半の文学作品の分析を行った。まず、シベリア文学を「シベリアの諸問題や自然・民族文化などの特徴を描く、シベリア人と自認する作家により創作される文学」と定義した。シベ

リア文学は 19 世紀末に政治運動の高まりの波に乗り、シベリア人の知識人により生み出された文学であるが、第 2 次世界大戦後には政治的要素が排除された農村文学及びエコロジー文学という要素が色濃くなっていく。さらにまた、20 世紀後半のシベリア文学作品を分析した結果、故郷という概念が中心に据えられる作品が多いことも明らかした。作家は自分のかつての故郷の状況を描くことを通して、第 2 次世界大戦後における産業振興政策の推進によって顕在化したシベリア全体を覆う環境問題について提起していると考察される。

第 3 章では 4 つのシベリア行政地域を例に、インタビューとアンケートで得られたデータを基にシベリア文学観光の実践とその特徴について分析が加えられる。シベリア文学観光には「隔絶された空間」としての特徴が見られ、参加者には一定程度の行動規制が働いていると同時に、自由行動と内省の対象の選択が可能な、「混交的空間」の側面も認められることが明らかになった。すなわち、ツアーの主催者が公立組織であり、ロシア連邦文化省が規定した実施方法の基準に沿っているため、ツアーの運営には確立されたコンセプト及び標準的ルートが定められている一方、そのルートは地元民の実際の社会空間を経由、通過し、また現場での観光者の行動は常に必ずしもガイドの指示に束縛されていないため、内省の対象の選択には一定程度の自由が許容されていると分析される。ツアーの内容は、それぞれの地元地域に所縁のあるシベリア作家に直接あるいは間接的に関連するものが多く、また、20 世紀後半のシベリア文学作品は地元の学校の教育プログラムに教材として含まれているため、地元民には特に馴染みのあるものとなっている。アンケート調査によって、地元民が全体の 79%を占める観光者は、ツアーに参加することで過去の個人的な記憶や感情的体験を想起させる対象に接して内省の機会を得ることが多いのだが、こうした機会を通して観光者の地域アイデンティティが強化される可能性があると考えられる。

第 4 章では、規制という要因が存在するにもかかわらずツアーでは自由行動が可能なことから、ツアーの行動の身体化という側面に焦点を当てて分析を加えられる。ここで言う身体化とは、抽象的理念や概念がツアー中の身体的感覚を伴う経験を通して参加者の精神に強化、定着されるプロセスである。具体的な事物との接触によってもたらされる感覚的経験は、感情的反応を出現させる契機ともなり、また、行動の自由度が高ければ、観光者はより自発的にそうした身体的経験を実践することにもなるが、その結果として過去の記憶との感情的なつながりもより主体的になされることになる。こうして、自由行動はより自発的な感情体験をもたらすのであり、参加者がツアーの対象物を実体的、直接的に経験、認識することに貢献する。さらにまた、各ツアーは限定的な特定の地域に所縁のある作家に関連した場所や施設を巡るにもかかわらず、地域住民である参加者は、作品によって伝えられた「シベリア」という包摂的な地域イメージを通してそれらを把握、認識するため、個別的な地域性よりはむしろ、シベリア人としてのアイデンティティや自然豊かな周縁的郷土への帰属意識が強化される。

最後に終章において、シベリア文学観光は、地域社会の状況や特質を写し出す地元作家の手になる文学作品に親しんだ地域住民が、そうした作品に関連した場所や施設を巡る形で実践されるものでありながら、そのツアーへの参加経験を通してなされるものは、個別具体的な地域アイデンティティではなく、より抽象性の高いシベリア地域アイデンティティの強化であることを再確認し、シベリア文学観光の最大の特質はそうしたアイデンティティ強化の収斂のあり方に見出し得ることを示して結びとした。